【背景】
嫌気性菌血症に対して、早急に適切な対応を行うためにはそのリスク因子を把握することが重要であるが、リスク因子に対する疫学研究は少ない。そこで、嫌気性菌血症発症に関するリスク因子を明らかにすることを目的に、レトロスペクティブに調査を行った。

【方法】
1999年1月1日から2012年12月を対象期間とし、愛知医科大学病院にて血液培養結果より嫌気性菌が検出された71例をケース症例とした。また、コントロール症例は、嫌気性菌以外の細菌が血液培養より検出された症例の中から、ケース症例1例に対して血液培養陽性時期をマッチングさせた4症例を選択した。ケース症例およびコントロール症例の患者背景を調査した。

【結果】
ロジスティック回帰分析を行った結果、原疾患に関するロジスティック回帰分析では「悪性新生物」（オッズ比（OR）：3.35, 95%信頼区間（C.I.）：1.85-6.09）、「ダグラス窩」（OR：25.90, 95% C.I.：2.90-25.00）または「胸部」（OR：3.35, 95% C.I.：1.19-9.43）にドレーン・カテール類が挿入されている症例、原疾患部位におけるロジスティック回帰分析では「消化管」（OR：3.29, 95% C.I.：1.38-7.81）、「泌尿器・生殖器」（OR：4.98, 95% C.I.：2.06-12.05）、さらに、「ダグラス窩」（OR：16.95, 95% C.I.：1.82-166.67）または「胸部」（OR：3.62, 95% C.I.：1.29-10.20）にドレーン・カテール類が挿入されている症例において嫌気性菌血症発症と有意な関連が認められた。

【結論】
今回の調査により嫌気性菌血症は悪性新生物、疾患部位として消化管および泌尿器・生殖器、ダグラス窩および胸部にドレーン・カテール類が挿入されている症例と関連が示された。この知見は嫌気性菌血症への早期かつ適切な対応に有用であると考えられた。